



海田中学校通信

平成30年8月27日

第13号



海田町立海田中学校 〒736-0026 広島県安芸郡海田町幸町 10-1

TEL(082)822-2258 HP <http://www.hrs-kaita-j.ed.jp>

E-mail kaita-jh03@hrs-kaita-j.ed.jp

学校教育目標：

「考え、実践する生徒の育成」

～やる気、元気、前向き～

2学期が始まりました・・・

猛暑日が続いた夏休みも終わり、2学期が始まりました。今年の夏の暑さは、大変厳しく、毎日のように「熱中症に気をつけましょう。」という言葉聞いたような気がします。それでも多くの人が暑さに負けず、部活動に励んでいました。今日、生徒のみなさんが元気に登校し、2学期を迎えられたことを嬉しく思います。充実した2学期になることを願っています。

さて、夏休みの間、生徒のみなさんは、どんなことを考えて過ごしたのでしょうか？8月6日の全校登校日では、体育館に集まり、広島に原子爆弾が投下された8時15分には広島市内の方向を向いて黙祷を行いました。その後、校長先生が次のようなお話をされました。

73年前の昭和20年（1945年）の8月6日に広島市に人類史上初めてとなる原子爆弾がアメリカ軍によって投下されました。紙屋町にあるエディオンの斜め裏手の上空600mで、この爆弾は炸裂して、多くの人の命と奪い、傷つけました。この爆弾は、通常の爆弾と違って、放射能を放射して長い年月の間、人々の体を蝕み続けました。

昭和20年の暮れまでに、亡くなった人の数は12万人とも15万人ともそれ以上とも言われています。また今年まで、原爆の影響で亡くなった人の名前を記録している原爆死没者名簿には、31万4118人の人の名前が記録されています。今の海田町の人口が3万人弱ですからその10倍の人亡くなっている訳です。

では、爆心地からたった10kmしか離れていないこの海田町での原爆での被害はどれくらいだったのでしょうか。

海田町史によればこう書かれています。「海田市町では、爆風により広島市側に面した窓ガラスが割れ、障子は内側へ吹き込まれ、屋根も吹き上げられた。屋外灯の電球・笠は破損し、掲示板も吹き飛ばされ、庭の柳が倒れた家もあった。原爆投下後になって警報が発令され、町民は不安にかられた。当日、海田市町の町民で広島市内に勤務・通学などして被爆し、また肉親を探しに入市し、いわゆる第二次被爆によって昭和二十年度内に死亡した人は、判明しているもので216名にのぼっている。」とあります。

広島に原爆が落とされ73年もの間核爆弾はとんでもなく威力を増し、もし今後核爆弾が使用されるようなことがあれば、人類そのものが滅亡するかもしれません。その危機は、私たちの普段の生活からは感じられませんが、すぐ目の前にあるのです。

広島、海田に生まれ、育ち、生活している者は、73年前、私たちの関係ある人たちに地獄のような苦しみを与えた原爆のことを決して忘れないで、語りつないでいく義務があると私は思います。

二度と広島、長崎の悲劇が繰り返されないよう、今日はみなさん一人一人にしっかり原爆、戦争、平和について考えてもらいたいと思います。

仲間を思いやれる2学期に・・・

今年の夏は、新聞やニュースで豪雨災害の被災地の様子が多く報道されており、被害の大きさを改めて実感させられると同時に、復興に向けて頑張っておられる方の思いに感心した人もたくさんいると思います。海田中学校の生徒のみなさんの中にも、実際に被災地に行き、ボランティア等を行った人もいるでしょう。身近な所でも「自分にも何かできることはないだろうか」・・・そのように考えて行動してくれた人がいます。

8月の初め、国信の自治会長さんから次のようなお電話をいただきました。

「今年は豪雨災害に関係で盆踊りを中止にした地区が多かったようですが、国信は災害で亡くなられた方をとむらうために行いました。その盆踊り大会に、海田中学校の生徒がたくさん参加をして一生懸命踊ってくれたのです。その姿を見てとても嬉しく思いました。地域が元気をもらった気がします。どうか生徒たちにお礼を言ってください。」

7月の西日本豪雨災害は大きな被害をもたらし、その跡を見ると本当に胸が痛みます。ですが、地域の行事に参加するという活動が、その地域をを活気づけたということは本当に素晴らしいことだと感じました。



登校日に体育館で話を聞いた後、それぞれの教室で、中国新聞の「学ぼうヒロシマ」という資料を使って、平和学習を行いました。その中に登世岡浩治さん（広島市安楽寺の前住職）という方が書かれた体験が載っていました。登世岡さんは自身も被爆され、弟さんを亡くされています。当時の思い、87歳になった今の思いを次のように述べておられます。

弟は顔もわからないほど重いやけどを負っていました。枕元に家族があつまり、お経を読んだとき「ありがとう」とつぶやいたのが最後の言葉になりました。天井の板で父がひつぎを造り、近くの公園で火葬しました。「わが手で弟をやくとは。涙が止まらなかった。」「知人、友人らの死を思うと堪えがたい気持ちになる。」と記憶を封印しました。

1994年、広島日タイ友好協会の平和交流で現地を訪れた際、断りきれず、黒い雨を浴びた体験などを話しました。「被爆後、お体は大丈夫ですか」と親身な質問を受け、心にしみました。

かわいい弟を奪われ、かつて「米国に復讐する」と憎しみを募らせていましたが、大学で仏教を学ぶうち、相手を敬う心こそが平和のお基本だと信じるようになりました。

「一人一人が生かされていることの有り難さを感じ、慈愛の心、尊敬の念を抱いてまわりに接していくことが平和実現への一歩」。多くの人にかみしめてほしいと願っています。（一部抜粋）



「平和な世界をつくろう」「命を大切にしよう」ということは、よく聞く言葉です。ですが、具体的にどのようなことをすればいいのだろうと考えた時、そのスタートは、「相手を思いやること」だと思います。そして「誰かの役に立ちたい」「誰かに喜んでもらいたい」「誰かを元気にしたい」という気持ちを持つこと。それが「平和」につながり「命を大切にすること」に結びついていくのではないのでしょうか。

2学期、生徒のみなさんが仲間を思いやり、ともに成長していってくれることを願っています。教職員一同、力を合わせ、子供たちが生き生きと学校生活を遅れるよう、精一杯頑張っていますので、どうぞよろしくお願いたします。